

男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連¹⁾

高橋 彩

愛知学院大学大学院総合政策研究科

男子大学生 348 名を対象に、進路選択時の親子間コミュニケーションの特徴をとらえる尺度を作成し、アイデンティティとの関連を検討した。青年の特徴として“議論の回避”“議論による立場の明確化”“結合性”“自律した意思決定”の因子が抽出された。議論の回避を高く示す青年はアイデンティティ達成得点が低く、職業決定におけるモラトリアムの得点が高かった。逆に議論による立場の明確化を高く示す青年は模索の得点が高かった。親の特徴として“独自性”“結合性”“議論の抑制”の因子を抽出し、親のコミュニケーションタイプを分類した。独自性と結合性が両方高い“相互交渉”や結合性だけが高い“応援”は、両方低い“不明確”より青年のアイデンティティ達成得点が高かった。親子間で議論を避けないこと、親が青年に受容的、支持的であることが、男子青年のアイデンティティの感覚の高さと職業決定への積極的取り組みと関連することが示唆された。

キーワード：親子間コミュニケーション、アイデンティティ、男子大学生、進路選択

問題と目的

青年期の主要な発達課題の一つはアイデンティティの達成である。アイデンティティとは、“過去において準備された内的な斉一性と連続性が、他人に対する自分の存在の意味の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである”(Erikson, 1963; 仁科訳, 1977)。つまりアイデンティティ形成は、自分と自分を取り巻く文脈との間で絶えず相互調節されるプロセスと考えられている(Bosma & Kunnen, 2001; Graafisma, Bosma, Grotevant, & de Levita, 1994)。職業、友情、性役割など、青年が直面する課題において、時に青年は親との間で考

えや意見の食い違いを経験する。こうした葛藤をどのように認識し、それをどのように調整するかによって、アイデンティティ発達は異なる(Bosma & Kunnen, 2001; Kerpelman, Pittman, & Lamke, 1997)。アイデンティティ形成の文脈としての親子関係に注目すれば、青年が進路選択という課題に直面する時に親子間でどのようなやりとりがなされるかによって、その後の青年のアイデンティティ発達は異なると考えられる。

近年、親子間の相互作用の特徴と青年のアイデンティティ探求(Cooper & Grotevant, 1987; 平石・久世・大野・長峰, 1999; 平石, 2000)や対人意識(平石, 2000)、自我発達や自尊感情(Allen, Hauser, Bell, & O'Connor, 1994; Hauser, Powers, Noam, Jacobson, Weiss, & Follansbee, 1984; Lippe, 2000)との関連が検討されてきた。これらの研究は、相互作用の特徴として他者からの分離と他者との結びつきという2つの側面を取り上げ、

1) 本研究を行うにあたりご指導下さいました愛知学院大学大学院総合政策研究科二宮克美先生に心より感謝申し上げます。また論文作成に際し大変貴重なご意見を頂いた審査委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

これら2つの側面がどのように表出されることが青年の心理社会的発達と関連するのかを検討している点で共通している。例えば、GrotevantとCooperらの個性化(individuation)モデルは、自分自身の視点をはっきり伝えることや自分と他者との見解の違いを述べる能力である“独自性”と、他者の信念と感情の尊重や他者の考えを進展させるために承認や励ましを与える“結合性”の2つの側面を取り上げている。結合性を中心とした会話の中で、個々の成員の独自性が表明されるような家庭の青年は、アイデンティティを探求する能力と複数の視点を調整する能力が高くなるという(Grotevant & Cooper, 1986)。同様に、Allen et al. (1994)は、他者から自分を区別する“自律性”と、他者の思考や感情を承認する“関係性”の2つの側面を取り上げている。そして青年が関係性と自律性の両方を表出すること(具体的には、他者の立場を確認したり同意を示しながら、不一致の理由を明らかにしたり、議論すること)と、青年の自我発達および自尊感情との間に高い相関があることを示している。どちらの研究も、他者からの分離と他者との結びつきの両方が重要であることを示唆している。逆に、親が青年の分離を抑制することは低い自我発達と関連している(Allen et al., 1994; Hauser et al., 1984)。

こうした先行研究から、親子間に意見の不一致や葛藤があっても、自分の意見を自由に議論したり、反対する理由を述べたり、他者の立場を確認したりすることができるが、青年の高い自我発達、高い自尊感情、アイデンティティ探求得点の高さと関連することが示唆される。杉村(2001)はアイデンティティ形成プロセスにおける探求を、自己の欲求・関心だけでなく、他者の意見・期待も考慮し、相談や討論といった形で他者を利用しながら、自己と他者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスととらえた。この意味で進路選択という親子間の話し合いにおいても、自分の意見を自由に議論したり、反対する理由を述べたり、

他者の立場を確認できるという特徴は、探求の結果として青年のアイデンティティ達成と関連すると予測される。

そこで本研究では、進路選択における親-青年間のコミュニケーションをとらえるための尺度を作成し、アイデンティティ尺度との関連を検討することにした。進路選択時の親子間コミュニケーションを取り上げた理由は、幼い頃に習得した役割や技術を、職業にどう結びつけるのかは、後期青年にとって重要な問題であるためである(Erikson, 1963; 仁科訳, 1977)。アイデンティティ・ステータス面接において“職業選択”は主要な領域であり、進学か就職かの決定、大学の専攻の選択など、進路に関する質問項目が含まれる(Marcia & Archer, 1993)。

さらに、職業や進路決定は、単に自分の欲求だけでなく、そこに親などの重要な他者から自分に向けられる期待や他者に対する自分の意味をいかに取り込むかという問題でもある。アイデンティティ研究において、このようなアイデンティティ概念が本来持っていた他者との結びつきの側面、「関係性」の重要性が再確認されてきている(岡本, 2002; 永田・岡本, 2005; 宗田・岡本, 2005; 杉村, 1998, 2001)。アイデンティティの主要な領域である進路選択における親子間コミュニケーションとアイデンティティの感覚との関連を検討することは“関係性”の視点からも意味があると考えられる。

また、先行研究の相互作用の特徴は、道徳的ジレンマ(Allen et al., 1994; Hauser et al., 1984)や家族旅行の計画(Cooper & Grotevant, 1987)といった特定の課題における議論を観察し、引き出されたものである。今回は親子間コミュニケーションを観察法ではなく、質問紙法により青年がどう認知しているかをたずねる。大学生にとって、職業選択領域のアイデンティティ探求に両親が果たす役割は大きい(平石, 1997; 杉村, 2001)。そのため、大学生にとって進路選択は具体的な親とのや

りとりが想起しやすいと考えた。

アイデンティティおよび親との相互作用には、性差が予測される。特に学校と将来の職業は、男子青年の方が女子よりもアイデンティティにとって重要な領域として述べることが多い (Bosma, 1992)。Cooper & Grotevant (1987) は、親子間相互作用と友情領域やデーティング (dating) 領域からなる対人領域のアイデンティティとの関連を検討した。その結果、女子は親が示す分離が友情領域 (友情における信念) の探求と関連したが、男子では親が示す結合性が友情領域とデーティング領域 (異性との交際における信念) の探求と関連した。このことから、アイデンティティ探求における親の役割を考えるには、同性の親か異性の親かによる違いとともに、アイデンティティ領域によって異なる可能性も考慮する必要がある。そこで今回は性差の問題を検討する前段階として、男子青年だけを取り上げ、親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連を検討する。

本研究の第1の目的は、青年が認知した親が示すコミュニケーションの特徴と青年のアイデンティティとの関連、及び青年自身が親に対して示すコミュニケーションの特徴と青年のアイデンティティとの関連を検討することである。意見の違いに応答的、受容的であるといった親の特徴は、青年のアイデンティティの感覚の高さと職業選択への積極的取り組みと正の相関があると予測される。青年は他者の視点を知ること、あいまいだった自己の視点が明確になることがある (杉村, 2001)。このことから、青年が親との話し合いを避けることや、親が自分の意見を示さないことは、青年のアイデンティティの感覚と職業選択の積極的取り組みと負の関連があると予測される。対人領域の探求と親の示す結合性との関連から (Cooper & Grotevant, 1987)、親が青年の意見に理解を示すことは職業選択への積極的取り組みと、アイデンティティの感覚の高さと正の相関があると予測される。

第2の目的は、親のコミュニケーションの特徴のうち、他者からの分離と他者との結びつきという2つの側面からコミュニケーションタイプを分類し、青年のアイデンティティの感覚と職業選択への積極的な取り組みとの関連を検討することである。結合性よりも分離を高く示す家族の青年は、結合性と分離の両方を高く示す家族の青年よりも、攻撃性と抑うつ気分が高い (Noack & Puschner, 1999) というように、コミュニケーションの特徴がもつ単独の影響だけでなく、複数の特徴がどのように表出されるのかも検討する必要がある。親が他者からの分離と他者との結びつきを両方表出するタイプの時、すなわち青年の意見に理解や支持を示しながら、親自身の考えも率直に伝えるタイプの時、青年のアイデンティティの感覚や職業選択への積極的な取り組みにおいて得点が高いことが予測される。

方 法

調査協力者

A大学の教養科目の受講生を対象に2006年5月と6月の授業内に行い、563名の協力を得た。母親と父親のデータに不備のない445名 (男子348名、女子97名) のうち、男子のみ (平均年齢18.8歳) を分析対象とした。

調査内容

1. 進路選択における親子間コミュニケーション尺度：先行研究で示された親子間相互作用における発話の分類基準 (Allen et al., 1994; Grotevant & Cooper, 1986; Hauser et al., 1984; Smetana, Yau, Restrepo, & Braeges, 1991) を参考にして作成した。青年が認知した親のコミュニケーションをとらえる17項目と青年自身のコミュニケーションをとらえる15項目を作成した。“あなたは、最近1~2年の間に、将来の職業を考えたり、進路を決定する時に、親とどのような話し合いをしましたか”と教示した。“非常にあてはまる”6点から“全くあてはまらない”1点の6件法で、母親と父親それ

それぞれに対して評定を求めた。また母親と父親がいない場合は主たる養育者に対して評定を求めた。

2. モラトリアム尺度（下山，1992）：24項目を使用した。“そう思う”5点から“そう思わない”1点の5件法で評定を求めた。“回避”“拡散”“延期”“模索”の下位尺度ごとに合計点を算出した。

3. Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版（以下 S-ESDS と略す）（三好・大野・内島・若原・大野，2003）：第V段階の“アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散”の下位尺度7項目を使用した。“あてはまる”4点から“あてはまらない”1点の4件法で評定を求めた。7項目を合計し，“アイデンティティ達成 S-ESDS”得点とした。

4. ラスムッセンの自我同一性尺度（Rusmussen Ego Identity Scale，以下 REIS と略す）日本語版（宮下，1987）：自我同一性の下位尺度12項目を使用した。“非常にそう思う”7点から“全くそう思わない”1点の7件法で評定を求めた。12項目を合計し，“自我同一性 REIS”得点とした。

REIS 日本版の項目が二重の意味をもち、複雑であるために、新しく開発された S-ESDS 尺度を採用した。しかし、REIS 日本版はアイデンティティ尺度として普及しているため、加えて検討した。両尺度はアイデンティティの感覚を測定し、点が高いほどアイデンティティが達成されていることを示す。

結 果

1. 進路選択における親子間コミュニケーション尺度の因子分析

青年の認知した母親のコミュニケーションを表す17項目について、分布に偏りのある2項目を除く15項目で因子分析（主因子法）を行った。固有値の減衰状況（第1因子から順に、3.59, 2.11, 1.34, 1.06）から3因子を指定し、プロマックス回転を行った。負荷量が低い項目と複数の因子に負荷をもつ4項目を除外した11項目で、再度因子分析（主因子法プロマックス回転）した結果を Table 1 に示す。第1因子は、「母親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと

Table 1 進路選択における親子間コミュニケーション尺度の母親および父親の項目の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転後）

項 目	母親 → 青年			父親 → 青年		
	I	II	III	I	II	III
I 独自性						
13 母（父）親は私の進路について意見を言うときに、その理由もはっきりと言った	.61	.00	.00	.66	.07	-.06
15 母（父）親は「将来こんな職業についてほしい」と言った	.56	-.00	-.00	.53	.02	-.02
10 母（父）親は私が意見を言っている途中なのに、「でも…」とさえぎって反論することがあった	.52	-.28	.10	.68	-.23	.13
4 母（父）親は、進路について「どうしてそうしたいの」と私に理由を聞いた	.52	.00	-.00	.57	.05	-.08
14 母（父）親は私の進路について「あなたはこれに向いている」と言った	.50	.13	-.00	.52	.17	.06
16 母（父）親は、母（父）自身がどうやって進路を決めてきたかについて、体験を話した	.34	.19	-.00	.52	.04	-.06
II 結合性						
7 母（父）親は最終的に私が決めた進路を応援してくれた	-.00	.79	.00	-.07	.96	.03
5 母（父）親は私のやりたいことをちゃんと理解したようだった	.00	.63	-.00	.01	.65	-.00
6 母（父）親は私の入学（就職）試験について「大丈夫だよ」と励ましてくれた	.00	.58	.00	.18	.51	.00
III 議論の抑制						
9 母（父）親は、私が進路についてどんな意見を言っても「いいんじゃない」と言うだけだった	-.00	.00	.73	-.05	.02	.59
8 母（父）親に進路の相談をしても、「よく分からない」と言われた	.00	.00	.67	.02	.02	.75
注. 青年の認知した母親（あるいは父親）のコミュニケーションを、	因子間相関					
母親（父親）→ 青年と略す。	II	.25		.31		
	III	-.11	-.37	-.09	-.18	

言った」,「母親は,進路について“どうしてそうしたいの”と私に理由を聞いた」などの6項目がまとまった。これは個性化モデル(Grotevant & Cooper, 1986; 平石他, 1999)の“独自性”の概念定義(自分自身の視点や見解をはっきり伝えること,自分と相手との意見の違いを表明すること)にあたるため,“独自性”と命名した。第2因子は「母親は最終的に私が決めた進路を応援してくれた」などの3項目がまとまった。これは“関係性”(Allen et al., 1994)の概念定義(他者の思考や感情を尊重する)や,個性化モデル(Grotevant & Cooper, 1986; 平石他, 1999)の“結合性”の概念定義(他者の信念や感情の尊重や,他者の考えを進展させるために承認や励ましを与えること)にあたる。関係性という用語は研究者によって定義が異なるためここでは“結合性”と命名した。第3因子は「母親に進路の相談をしても,“よく分からない”と言われた」と「母親は,私が進路につ

いてどんな意見を言っても“いいんじゃない”と言うだけだった」の2項目となり,“議論の抑制”と命名した。

父親の相互作用についても母親と全く同様の因子構造が得られた(Table 1)。母親の第1因子の項目16は因子負荷量が.34と低かったが,父親では.52であり項目として採用した。

次に青年の母親へのコミュニケーションを表す15項目について,因子分析(主因子法)を行った。固有値の減衰状況(第1因子から順に, 3.47, 2.98, 1.38, 1.19, .86)から4因子を採用し,プロマックス回転を行った。複数の因子に負荷をもつ2項目を除き,再度13項目で因子分析(主因子法プロマックス回転)した結果をTable 2に示す。第1因子は「私は母親と進路について話し合うことをなるべく避けていた」,「私は母親に将来のことを話すうちにだんだんと腹がたってくるのがあった」など4項目からなり,“議論の回避”と

Table 2 進路選択における親子間コミュニケーション尺度の青年の項目の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転後)

項 目	青年→母親				青年→父親			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV
I 議論の回避								
26 私は母(父)親と進路について話し合うことをなるべく避けていた	.81	-.10	.02	.04	.86	-.00	.00	.00
25 母(父)親が私の進路について話す時には私はその話を早く終わらせようとした	.76	-.03	.01	-.16	.85	.00	-.00	-.13
27 母(父)親の進路についての意見は私は聞くふりだけした	.66	.09	.00	.11	.73	-.00	-.00	.00
29 私は母(父)親に将来のことを話すうちにだんだんと腹がたってくるのがあった	.58	.20	-.02	.06	.60	.00	.13	.00
II 議論による立場の明確化								
19 母(父)親が私の進路について反対したら,認めてもらえるように説得した	.08	.84	-.09	-.02	-.00	-.00	.94	.00
20 母(父)親が私の進路の希望に反対した時,「どうして反対するの」と理由をたずねた	.15	.72	.04	.02	.12	.00	.75	.00
18 私は自分の進路の希望についてどうしてそうしたいのか理由を母(父)親に説明した	-.26	.45	.09	-.07	-.11	.13	.44	-.24
III 結合性								
24 私は最終的に母(父)親の期待に添うように進路を決めた	.09	-.17	.75	.07	.00	.67	-.00	.00
22 私の将来について母(父)親が心配するときは,母(父)親を安心させようとした	-.05	.11	.62	-.00	-.00	.87	-.00	.12
23 私は母(父)親のアドバイスに対して「それもいいかも」と同意した	.06	.05	.44	-.29	-.00	.37	.19	-.22
21 私は母(父)親の立場になって自分の進路を考えてみた	-.12	.24	.40	.12	.00	.52	.00	-.00
IV 自律した意思決定								
30 私は自分の進路を母(父)親に相談せず,ほぼ自分で決めた	-.05	.02	.00	.82	-.00	.00	.00	.90
28 母(父)親には「この学校/会社を受けるから」と自分で決めた結果だけを報告した	.08	-.04	.05	.68	-.00	.00	.00	-.71

注. 青年が母親(あるいは父親)に対して示したコミュニケーションを,青年→母親(父親)と略す。

因子間相関	II	III	IV
II	.06		
III	.02	.47	
IV	.47	-.14	-.21

Table 3 進路選択における親子間コミュニケーション尺度の下位尺度得点と相関関係

	母親→青年			父親→青年			青年→母親				青年→父親			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
母親→青年														
1 独自性	—													
2 結合性	.22**	—												
3 議論の抑制	-.08	-.21**	—											
父親→青年														
4 独自性	.44**	.25**	.07	—										
5 結合性	.13*	.57**	-.10	.31**	—									
6 議論の抑制	.09	-.01	.28**	-.08	-.10	—								
青年→母親														
7 議論の回避	.11*	-.30**	.17**	.06	-.15**	.14**	—							
8 議論による立場の明確化	.44**	.31**	.02	.37**	.26**	.02	.06	—						
9 結合性	.35**	.32**	.05	.33**	.24**	.10	.03	.41**	—					
10 自律した意思決定	-.19**	-.29**	.22**	-.03	-.16**	.06	.37**	-.13*	-.17**	—				
青年→父親														
11 議論の回避	.10	-.15**	.10	.12*	-.27**	.31**	.55**	.10	.08	.25**	—			
12 議論による立場の明確化	.31**	.30**	-.01	.57**	.36**	-.05	.01	.67**	.35**	-.07	.04	—		
13 結合性	.30**	.25**	.08	.51**	.43**	-.04	.05	.36**	.65**	-.07	-.02	.49**	—	
14 自律した意思決定	-.09	-.21**	.15**	-.23**	-.31**	.32**	.16**	-.13*	-.13*	.58**	.33**	-.19**	-.23**	—
<i>M</i>	2.63	3.95	2.77	2.55	3.57	2.67	2.86	2.60	2.74	3.25	2.77	2.51	2.54	3.40
<i>SD</i>	.95	1.16	1.30	1.06	1.28	1.29	1.22	1.18	.98	1.48	1.33	1.20	1.06	1.66
α 係数	.67	.69	.63	.75	.74	.61	.80	.69	.66	.73	.84	.75	.71	.74

注. 青年の認知した母親（あるいは父親）のコミュニケーションを、母親（父親）→青年と略す。

** $p < .01$, ** $p < .05$

青年が母親（あるいは父親）に対して示したコミュニケーションを、青年→母親（父親）と略す。

命名した。第2因子は「母親が私の進路について反対したら、認めてもらえるように説得した」など3項目がまとまったため“議論による立場の明確化”と命名した。第3因子は、「私は最終的に母親の期待に沿うように進路を決めた」などの4項目がまとまった。他者の信念や感情の尊重 (Grotevant & Cooper, 1986; 平石他, 1999) を表すため“結合性”と命名した。第4因子は、「私は自分の進路を母親に相談せず、ほぼ自分で決めた」の2項目になり、“自律した意思決定”と命名した。

青年の父親への相互作用は、第2因子に“結合性”、第3因子に“議論による立場の明確化”となったが、因子数や因子内の項目は母親と同じであった (Table 2)。

各因子の項目を合計し項目数で除し、下位尺度

得点を算出した。Table 3 に進路選択における親子間コミュニケーションの下位尺度得点の平均値と標準偏差、下位尺度間の相関係数を示す。

2. 青年の認知した親のコミュニケーションと青年のアイデンティティとの相関

母親と父親の親子間コミュニケーションの下位尺度とアイデンティティの各変数との相関係数を求めた (Table 4)。母親と父親の“独自性”は、モラトリウム尺度の模索と正の相関 (母 $r = .18$, 父 $r = .14$) があった。“結合性”はアイデンティティ達成 S-ESDS (母 $r = .20$, 父 $r = .20$) 及び自我同一性 REIS (母 $r = .29$, 父 $r = .23$) と正の相関があった。また母親の“結合性”は模索と正の相関 ($r = .16$) があり、回避と延期とは負の相関 (いずれも $r = -.11$) があった。“議論の抑制”は、アイデンティティ達成 S-ESDS と負の相関 (母 $r = -.12$,

Table 4 母親および父親のコミュニケーションと青年のアイデンティティ変数との相関係数

	母親 → 青年			父親 → 青年		
	独自性	結合性	議論の抑制	独自性	結合性	議論の抑制
アイデンティティ達成 (S-ESDS)	-.08	.20**	-.12**	.02	.20**	-.15**
自我同一性 (REIS)	.08	.29**	-.10	.06	.23**	-.13*
回避	.04	-.11*	.08	.02	-.03	.13*
模索	.18**	.16**	.11*	.14**	.06	.11*
拡散	.05	-.04	.13*	.08	-.09	.11*
延期	-.02	-.11*	.02	-.01	-.08	.12*

** $p < .01$, * $p < .05$

注. 青年の認知した母親 (あるいは父親) のコミュニケーションを, 母親 (父親) → 青年と略す。

Table 5 青年のコミュニケーションと青年のアイデンティティ変数との相関係数

	青年 → 母親				青年 → 父親			
	議論の回避	議論による立場の明確化	結合性	自律した意思決定	議論の回避	議論による立場の明確化	結合性	自律した意思決定
アイデンティティ達成 (S-ESDS)	-.27**	.04	-.10	-.07	-.21**	.10	.05	-.10
自我同一性 (REIS)	-.29**	.20**	.04	-.11**	-.21**	.19**	.10	-.15**
回避	.20**	-.14**	.04	.01	.15**	-.11*	.02	-.00
模索	.03	-.23**	.17**	-.05	.05	.17**	.16**	.01
拡散	.11*	-.02**	.06	-.04	.08	-.06	.09	.02
延期	.19**	-.12*	.03	.01	.23**	-.08	-.05	.00

** $p < .01$, * $p < .05$

注. 青年が母親 (あるいは父親) に対して示したコミュニケーションを, 青年 → 母親 (父親) と略す。

父 $r = -.15$) があった。父親だけ自我同一性 REIS と負の相関があった。また父親では, “議論の抑制” とモラトリアム尺度のすべての変数との間に正の相関 ($r = .11 \sim r = .13$) があった。母親ではモラトリアム尺度の模索 ($r = .11$) と拡散 ($r = .13$) との間に正の相関があった。

3. 青年のコミュニケーションとアイデンティティとの関連

青年の親子間コミュニケーションの下位尺度とアイデンティティの各変数との相関係数を Table 5 に示す。青年が親へ示す “議論の回避” は, アイデンティティ達成 S-ESDS (母 $r = -.27$, 父 $r = -.21$) と自我同一性 REIS (母 $r = -.29$, 父 $r = -.21$) と負の相関があった。また “議論の回避” は, モラトリアム尺度の回避 (母 $r = .20$, 父 $r = .15$) 及び

延期 (母 $r = .19$, 父 $r = .23$) と正の相関があった。親への “議論による立場の明確化” は, 自我同一性 REIS (母 $r = .20$, 父 $r = .19$) と正の相関があった。また “議論による立場の明確化” は, モラトリアム尺度の回避 (母 $r = -.14$, 父 $r = -.11$) と負の相関があり, 模索とは正の相関 (母 $r = .23$, 父 $r = .17$) があった。母親のみ “議論による立場の明確化” と延期との間に負の相関があった ($r = -.12$)。親へ示す “結合性” はモラトリアム尺度の模索と正の相関 (母 $r = .17$, 父 $r = .16$) があった。 “自律した意思決定” は, 自我同一性 REIS (母 $r = -.11$, 父 $r = -.15$) と負の相関があった。

4. 親のコミュニケーションのタイプと青年のアイデンティティとの関連

他者からの分離と他者との結びつきがどのようなバランスで表出されることが、青年のアイデンティティ感覚の高さと職業選択の積極的な取り組みに関連するのかを検討する。母親と父親のコミュニケーション特徴のうち、自己の視点を示し、自己と他者の不一致を明確にしようとする“独自性”と、他者の考えの尊重や承認を表す“結合性”の2つの下位尺度を取り上げた。

親のコミュニケーションタイプの特徴が明確になるように平均値ではなく平均値 -1/2SD を低群、平均値 +1/2SD を高群とし、この2つの下位尺度の高低の組み合わせから、4つのタイプに分類した。両方低い“不明確”タイプ、独自性が高く結合性は低い“親主導”タイプ、独自性は低く結合性が高い“応援”タイプ、両方高い“相互交渉”タイプと名づけた。タイプを独立変数とし、“アイデンティティ達成 S-ESDS” “自我同一性 REIS” “回避” “拡散” “延期” “模索” 得点を従属変数と

する1要因分散分析を行った。Table 6 に母親・父親のコミュニケーションタイプ別にアイデンティティの各変数の合計得点を示した。

母親タイプについて分散分析をした結果、アイデンティティ達成 S-ESDS ($F(3, 114)=4.31, p<.01$) と自我同一性 REIS ($F(3, 114)=9.18, p<.01$) と模索 ($F(3, 114)=5.06, p<.01$) においてタイプの効果が有意であった。Tukey の HSD による多重比較の結果、アイデンティティ達成 S-ESDS 得点は、“応援” と “相互交渉” が、“親主導” よりも高かった。自我同一性 REIS 得点は、“応援” と “相互交渉” が、“不明確” よりも高く、“相互交渉” は “親主導” よりも高かった。模索得点は “相互交渉” が “不明確” よりも高かった。

父親タイプは母親と同様に、アイデンティティ達成 S-ESDS ($F(3, 143)=3.51, p<.05$) と自我同一性 REIS ($F(3, 143)=4.10, p<.01$) でタイプの効果が有意であったが、模索は有意ではなかった。多重比較の結果、アイデンティティ達成 S-ESDS 得点は、“応援” が “親主導” と “不明確” よりも高かつ

Table 6 親のコミュニケーションタイプ別アイデンティティ得点

	母親のコミュニケーションタイプ								多重比較の結果
	不明確 n=50		親主導 n=28		応援 n=25		相互交渉 n=45		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
アイデンティティ達成 (S-ESDS)	16.84	4.14	15.32	4.85	18.72	3.78	18.53	4.36	親主導<応援≒相互交渉
自我同一性 (REIS)	53.36	9.22	55.64	9.84	60.00	9.70	61.76	9.08	不明確<応援≒相互交渉, 親主導<相互交渉
回避	11.32	3.52	11.46	3.71	10.00	3.39	10.64	3.66	
模索	13.30	2.91	14.46	2.03	14.56	2.27	15.27	2.36	不明確<相互交渉
拡散	12.80	3.08	13.82	3.01	12.68	3.02	13.18	3.85	
延期	9.34	3.20	8.96	3.13	8.44	3.03	8.07	2.63	

	父親のコミュニケーションタイプ								多重比較の結果
	不明確 n=54		親主導 n=16		応援 n=32		相互交渉 n=45		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
アイデンティティ達成 (S-ESDS)	16.22	4.33	15.06	2.74	18.84	4.02	17.49	5.37	親主導≒不明確<応援
自我同一性 (REIS)	54.67	9.08	54.37	7.75	61.19	11.58	60.11	11.65	不明確<応援
回避	10.78	3.38	10.56	2.90	10.53	3.29	10.71	3.38	
模索	13.94	2.62	14.19	2.10	13.44	2.64	14.67	3.05	
拡散	13.48	3.20	13.00	2.71	11.72	2.84	13.07	3.76	
延期	9.20	3.12	8.69	2.65	8.69	2.68	8.36	2.53	

た。自我同一性 REIS 得点は、“応援”が“不明確”よりも高かった。

考 察

1. 青年が認知した親のコミュニケーションの特徴と青年のアイデンティティ

親が示す“結合性”とアイデンティティの感覚の得点との間に正の相関があった。先行研究 (Lippe, 2000)で母親の示す受容や理解と女子青年の高い自我発達との関連が示されているが、今回の結果から、男子青年が、進路選択時に母親や父親から応援や励ましを示されたことと、男子青年のアイデンティティの感覚の高さとの関連が示唆された。また、親が示す結合性と対人領域のアイデンティティ探求との関連 (Cooper & Grotevant, 1987) から、親の結合性とモラトリウム尺度の模索との間に正の相関があると予測した。本研究の結果から母親の示す結合性と模索の間には低い正の相関があったが、父親ではモラトリウム尺度のすべての下位尺度で有意な相関がなかった。このことから、職業領域において親の示す結合性と、男子青年のアイデンティティ探求との関連は明確にならなかった。しかし母親の示す結合性とモラトリウム尺度の回避や延期との間にも低い負の相関があり、父親よりも母親の示す結合性と男子青年の職業選択への積極的な取り組みとの間に関連がある可能性が示唆された。

職業や進路決定は、親などの重要な他者から自分に向けられる期待をいかに取り込むかという問題でもある。そのため、親が自分の意見を示さないことは、青年のアイデンティティの感覚や職業選択の積極的な取り組みとは負の関連があると予測した。本研究の結果、母親や父親が示す“独自性”とモラトリウム尺度の模索との間に、低い正の相関があった。このことから、進路選択時に親が考えをはっきり伝えたことと男子青年が感じること、職業選択における男子青年の積極的な取り組みとの関連が示唆された。また相関係数は低い

けれども、母親や父親が示す“議論の抑制”とアイデンティティ達成 S-ESDS との間に負の相関があり、モラトリウム尺度の拡散との間には正の相関があった。さらに父親ではアイデンティティ未確立と関連するモラトリウム尺度の回避 (下山, 1992) や延期とも正の相関があった。このことから職業選択時に親から意見をきけなかったと青年が感じること、アイデンティティの感覚の低さや職業選択を先延ばしする態度との関連が示唆された。

2. 青年の示すコミュニケーションの特徴と青年のアイデンティティ

“議論の回避”および“自律した意思決定”とアイデンティティの感覚の得点との間に負の相関があった。また、“議論の回避”とモラトリウム尺度の回避や延期と間に正の相関があった。相関係数はいずれも低い、予測したような進路決定時に親と会話を避けること、アイデンティティの感覚の低さや職業決定をあえて行わず先延ばしにする態度との関連が部分的に支持された。青年期におけるアイデンティティ形成は、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の視点の間の食い違いを相互調整によって解決するプロセスである (杉村, 2001)。そのため親との話し合いを避ける青年は、他者の視点の内在化に失敗しているとも考えられる。

その逆に、“議論による立場の明確化”は、自我同一性 REIS および模索と正の、拡散および回避と負の相関があった。先行研究 (Allen et al., 1994) で青年の“自律した関係性”，すなわち“他者の立場を確認しながら、不一致の背後の理由を説明し議論すること”と高い自我発達や自尊感情との関連が示されている。相関係数は低いけれども、今回の結果からは反対されても親にその理由をたずねたり、説得したりすること、アイデンティティの感覚の高さや職業決定への積極的な取り組みとの関連が示唆された。アイデンティティの感覚は、自分自身の自己定義と他者からの期待

や社会の中での自分の役割が一致している感覚からなる(三好他, 2003)。そのため、自分と親の意見を確認し不一致があればそれを調整しようとするのが、アイデンティティの感覚と関連したと考えられる。

母親と父親への“結合性”は模索と低い正の相関があった。先行研究で、青年が親に対して示す“機会を与える”行動は、青年自身の自我発達と正の関連があった(Hauser et al., 1984)。“機会を与える”行動には受容と共感が含まれており、これは本尺度の“結合性”の質問項目にあたる。本研究の結果からは親の立場や期待、感情に配慮することと、アイデンティティの感覚の高さとは関連せず、職業選択への積極的取り組みとの関連がわずかに示された。

3. 親のコミュニケーションタイプと青年のアイデンティティとの関連

母親のコミュニケーションタイプは、予測されたように“独自性”と“結合性”の両方が高い“相互交渉”タイプは、その逆で両方低い“不明確”タイプよりも、アイデンティティの感覚や模索の得点が高かった。親子間相互作用において独自性と結合性がともに表出されることが青年のアイデンティティ探求と関連するとした先行研究(Grotevant & Cooper, 1986)を支持したと言える。しかし“結合性”のみが高い“応援”タイプの母親の場合も、“不明確”タイプや、“独自性”だけが高い“親主導”タイプの母親よりも青年のアイデンティティの感覚が高くなった。

父親の“応援”タイプは、“不明確”タイプや“親主導”タイプよりもアイデンティティの感覚の得点が高かった。青年のコミュニケーションの特徴とあわせて考えると、男子と父親との間では、お互いに結合性を示すことが、青年のアイデンティティの感覚を強めることが示唆される。

親のコミュニケーション特徴と青年のアイデンティティ変数との相関結果もあわせて考えると、青年のアイデンティティの感覚にとっては、母親

と父親の示す“結合性”は“独自性”よりも、重要であると考えられる。後期青年の親子関係において独自性が発揮されることが必ずしも肯定的な意味をもつわけではないという指摘(平石, 2000)と一致する結果となった。

今後の課題は、まず親のコミュニケーション特徴はあくまでも青年が認知したものであるため、親自身の評定を用いて検討する必要がある。第2に、今回の進路選択における親子間コミュニケーション尺度において親が示すネガティブな特徴が十分にとらえられなかった。心理的離乳の観点から大学生の親子関係は、親と対等で信頼され承認された関係となる(落合・佐藤, 1996)ためかもしれない。親子関係の転換期である高校生に調査を実施し、親が示すネガティブな特徴を抽出するとともに、さらに大学生でみられた親のコミュニケーション特徴と青年のアイデンティティとの関連について比較検討が必要である。第3に、相関的研究のため、因果関係は明らかではない。青年のアイデンティティ発達が、両親から青年のアイデンティティ探求をさらに促進するような行動を引き出すことも考えられる(Kroger, 2000)。これらの点については、面接法も用いながらさらに検討する必要があるだろう。本研究ではまず男子大学生を取り上げた。職業領域のアイデンティティ形成において母親と父親が果たす役割は、男子青年と女子青年では異なるだろう。また同一視の対象として同性の親と異性の親ではその役割も異なる。今後は以上の点をふまえ、女子青年を対象に検討する必要がある。

引用文献

- Allen, J. P., Hauser, S. T., Bell, K. L., & O'Connor, T. G. (1994). Longitudinal assessment of autonomy and relatedness in adolescent-family interactions as predictors of adolescent ego development and self-esteem. *Child Development*, *65*, 179-194.
- Bosma, H. A. (1992). Identity in adolescence: Managing commitments. In A. G. Adams, T. P. Gullotta, & R. Mon-

- tenayor (Eds.), *Adolescent identity formation*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications. pp. 91-121.
- Bosma, H. A., & Kunnen, E. S. (2001). Determinants and mechanisms in ego identity development: A review and synthesis. *Developmental Review*, **21**, 39-66.
- Cooper, C. R., & Grotevant, H. D. (1987). Gender issues in the interface of family experience and adolescents' friendship and dating identity. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 247-264.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 I-II みすず書房)
- Graafsma, T. L. G., Bosma, H. A., Grotevant, H. D., & de Levita, D. J. (1994). Identity and development: An interdisciplinary view. In H. A. Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant, & D. J. de Levita (Eds.), *Identity and development: An interdisciplinary approach*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp. 159-169.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, **29**, 82-100.
- Hauser, S. T., Powers, S. I., Noam, G. G., Jacobson, A. M., Weiss, B., & Follansbee, D. J. (1984). Familial contexts of adolescent ego development. *Child Development*, **55**, 195-213.
- 平石賢二 (1997). 大学生の職業的アイデンティティの探求と親子間相互交渉 三重大学教育学部研究紀要, **48**, 177-187.
- 平石賢二 (2000). 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連 家族心理学研究, **14**, 41-59.
- 平石賢二・久世敏雄・大野 久・長峰伸治 (1999). 青年期後期の親子間コミュニケーションの構造に関する研究——個性化モデルの視点から—— 青年心理学研究, **11**, 19-36.
- Kerpelman, J. L., Pittman, J. F., & Lamke, L. K. (1997). Toward a microprocess perspective on adolescent identity development: An identity control theory approach. *Journal of Adolescent Research*, **12**, 325-346.
- Kroger, J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.
- Lippe, A. L., von der (2000). Family factors in the ego development of adolescent girls. *Journal of Youth and Adolescence*, **29**, 373-393.
- Marcia, J. E., & Archer, S. L. (1993). Identity status interview: Late adolescent college form. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matteson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky (Eds.), *Ego identity: A handbook for psychosocial research*. New York: Springer-Verlag. pp. 304-305.
- 宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, **45**, 65-76.
- 永田彰子・岡本祐子 (2005). 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討 教育心理学研究, **53**, 331-343.
- Noack, P., & Puschner, B. (1999). Differential trajectories of parent-child relationship and psychosocial adjustment in adolescents. *Journal of Adolescence*, **22**, 795-804.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.
- 岡本祐子 (編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で—— 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- Smetana, J. G., Yau, J., Restrepo, A., & Braeges, J. L. (1991). Adolescent-parent conflict in married and divorced families. *Developmental Psychology*, **27**, 1000-1010.
- 宗田直子・岡本祐子 (2005). アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討——「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み—— 青年心理学研究, **17**, 27-42.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因 発達心理学研究, **12**, 87-98.

Male Adolescent's Identity And Communication with Parents during the Period of Career Decision Making

Aya TAKAHASHI

Graduate School of Policy Studies, Aichi Gakuin University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 2, 159-170

This study examined the relationship between identity status and communication with parents of male adolescents during the period of career decision making. University students, 348 males, completed a questionnaire that included scales of their communication with parents about their career decision making, and Japanese-version Rasmussen's Ego Identity Scale, and others. Factor analysis of their communication yielded four factors: avoidance of discussion, discussion to clarify situation, autonomous decision making, and connectedness. Avoidance of discussion had a negative correlation with identity achievement scores, and a positive correlation with moratorium scores. Discussion to clarify situation had a positive correlation with identity achievement scores. Factor analysis of father and mother communication as perceived by the students yielded three factors: individuality, connectedness, and inhibition of discussion. Identity achievement scores were higher for those with mutual-negotiation parents who were high on both individuality but high on connectedness, than for those with ambiguous parents who were low on individuality but high on connectedness, than for those with ambiguous parents support parents who were low both. These results suggested that responsiveness and acceptance behavior in parental communication was positively related to male adolescents' identity status.

Key words: adolescent-parent communication, identity, male university student, career decision making